学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０２１年５月１日
文責：ＪＵＮ

子どもの事実、どれだけ見ていますか？

１　指導法ではなく、子どもの事実を見ること

一貫して言い続けてきたこと、著書にも著し続けてきたことがあります。それは、「教師は、授業のやり方よりも前に、子どもの事実を見るようにしなければならない」ということです。けれども、それを伝えきることは難しく、一貫させるにはある種の覚悟が必要でした。

学ぶのは子どもです。しかも学んでいる子どもの学びの状況は、一人ひとり異なります。それら一人ひとりの子どもの学びを少しでも豊かにするために行うのが授業です。それには子どもの事実に応じて行わなければならないのは当然です。だとしたら、教師は、いつでも、どんな場合でも、子どもの事実を、目を凝らして見つめなければなりません。教師がどう授業するかは、そういう子どもの事実に基づいて行うものです。

このように考えてみれば、私が言い続けていることは当たり前のことです。それなのに、なぜそう述べることに「覚悟」が必要だったのでしょうか。

日本のこれまでの授業研究は、どちらかと言うと教師としてどう授業するかの研究でした。教材をどう解釈するか、どのように発問するか、どのように授業を組み立てるか、つまりどう教えるかの研究だったのです。なかには、学習指導案を詳細に作り、その通りに進行した授業がよい授業だなどというとんでもない考え方もあったほどです。だから、教師たちの意識は教えるための授業の「やり方」に向いてしまったのです。もちろん、子どものわからなさに応じたり、子どもの考えを大切にしたりすることはあります。けれでも、「やり方」への誘惑が絶えず忍び寄り、ささやきかけ、教師はいつの間にかその穴にはまり込んでしまうのです。

どう授業するかに意識が向くと、子どもの事実を見るよりも教え方という技術的なことを求めて取り組むことになります。それがだれもが行っている授業研究だったのですから、子どもの事実を見ようという意識が不十分になるのは仕方のないことでした。でも、それが不十分だと意識されていなかったら、子どものことはまずまず見えている、そう思い込んでいたとしたら。

そのような教師の皆さんに対して、指導方法よりも子どものことに時間を割いて語り、もっと子どもの事実を見るように言えば、違和感を抱く人がいるにちがいありません。時には、教師のやり方がよかったと多くの人が評価した授業に対して、子どもの事実から考えればそうではないとか、大切なのはそこではないとか言わなければならないことがあります。そういうとき、聴いてくださる皆さんとの間にズレが生じるのです。ズレは私にとってうれしいことではありません。

それでも私は語り続けなければならない、そう思っています。だから覚悟が必要なのです。

２　私がこのことの大切さに気づいたのは

私は、教師になってからずっと「よい授業をしたい」という憧れのような感情を抱き続けていました。それが年々過熱化し、30 歳をこえたあたりからは「すごい授業をしたい」という衝動にかられるようになりました。その私の思いは、県内外を問わず、授業にかかわる研究会には積極的に足を運び、研究報告、授業報告も願い出るという行動にもなっていきました。

そんな私の強い思いが、あるとき、強烈なダメ出しを受けることになったのです。子どもに背を向けられたのです。５年生、６年生と２年間担任した学級でした。卒業まで残り半年を切ったあたりから、何人かの子どもが私の指導を受けつけなくなったのです。それは私にとって経験したことのないことでした。私は、砂を噛むような思いを味わいながら、子どもたちを卒業させました。それは私にとって衝撃的な挫折でした。

このいきさつは、『教師が壁をこえるとき』（岩波書店）に詳述したのですが、それは、「すごい授業」を実現したいと思うあまり、子どもの事実や思いを温かくゆったりと見つめ、子どものペースや考えに合わせるということを忘れたことから起きたことでした。

この学級の子どもたちを送り出した後、私は１年間苦しみました。そして、ようやく気づいたのです、私が教師としてしなければならないのは、「すごい授業」をつくることではなく、「子どもにとってのよい学び」を創り出すことなのだと。

こうして、私の「学び合う学び」が生まれたのでした。

そういういきさつがあるだけに、先生方が「よい授業」に憧れ、授業のやり方に走る気持ちはわからないではないのです。しかし、私は、自分の体験で、そういう意識が強ければ強いほど「子どもにとってのよい学び」は生まれないということを知りました。だからこそ、先生たちに、子どもの事実を見つめてほしいのです。そして、その子どもの事実に応じて生まれる学びの事実の素晴らしさを感じてほしいのです。もちろんそれが簡単なことではないのはわかっています。自分だって、そう簡単には転換できなかったのですから。

３　子どもの事実が見えたとき

「子どもの事実をみる」ことの大切さについて、今もって思い出すことのできる印象的な授業がいくつもあります。そのうちの１つの事例について述べることにします。

５年ほど前に参観した、小学校３年生の「ありの行列」という説明文を読む国語の授業でのことでした。

この説明文は、「なぜ、ありの行列ができるのでしょうか」という問題提起を提示したうえで、一人の学者がそれをどのように明らかにしていったかを記した文章です。この日、子どもたちは、学者がありに行列をつくらせて観察する様子の書かれた次の文章を読んでいました。

――　はじめに、ありの巣から少しはなれた所に、ひとつまみのさとうをおきました。しばらくすると一ぴきのありが、そのさとうを見つけました。これは、えさをさがすために、外に出ていたはたらきありです。ありは、やがて、巣に帰っていきました。すると、巣の中から、たくさんのはたらきありが、次々と出てきました。そして、列を作って、さとうの所まで行きました。ふしぎなことに、その行列は、はじめのありが巣に帰るときに通った道すじから、外れていないのです。――

素直な子どもたちでした。何人もの手があがり、自然な語り口で発言していました。授業をする教師も、子どもたちのそれらの考えを誠実に受け止め授業を進めていました。よい子どもたち、感じのよい先生、先生と子どもの関係もいいようだ、授業を参観した人たちは、おおむねそのように感じたのではないでしょうか。

私も、子どもたちにも教師にも同じような好感を抱いていました。けれども、子どもの言っていることを聴いているうちに、これは？と思い始めました。子どもたちが、学者が行った実験がどういうものだったか、しっかり読めていないようなのです。前掲の本文を見ていただいてわかるように、この段落の最後に「その行列は、はじめのありが巣に帰るときに通った道すじから、外れていないのです。」と書かれています。にもかかわらず次のような発言をしていたのです。

「行く道と帰る道がいっしょだとごっつんこしちゃう」
「（自分たちの）遠足みたいに（行く道と帰る道が）いっしょだと、つまんなくなっちゃう」
「ずっと同じだと飽きちゃう。だから、（行く道と帰る道は）いっしょじゃないと思う」

なんとも微笑ましい考えです。愉快だとも思います。けれども、この文章を読む学びとしてこのまま受け入れてしまうことはできません。たぶん「道すじから外れていない」ということの意味がわからないのでしょう。どうすればよいでしょうか。

大切なのは、この子どもの考えを、間違いとして即座に否定してしまうのではなく、このように考えた子どもの事実に寄り添ってみることです。この子たちの言っていることは自分たちの経験に基づいているものだということから考えて、彼らが素直にそう思ったのだということが感じられます。それなら、その素直な考えを受け入れてみなければなりません。

すると、ありが同じ道を行ったり来たりすれば「ごっつんこ」してしまうという「子どもの言っていること」は、そりゃそうだと思えてきます。もちろん、同じ道だと「飽きる」ということも、子どもの気持ちならそう思うわなあと、説明文の読みとは別にわかってやりたくなります。

しかし、それだけだと、説明文を読む学びとして不適切になります。ですから、たとえば、「そうだね、ごっつんこしちゃうよね。遠足みたいに、行きも帰りも同じだと、飽きちゃうかもしれないね」と肯定的、共感的に受け取ったうえで、「じゃあ、ありはどんな道を帰ったんだろう？　書いてあることをもう一度読んでみよう」というように、音読をしたり、ペアで考えさせたりして、文章の読みに戻すのもよいでしょう。その中で、「道すじから外れない」という言葉の意味も明らかにできるでしょう。

けれども、それだけで終わってしまうと、「自分たちの言ったことは間違っていた」としか子どもたちの心に残らないのではないでしょうか。もちろん、間違いに気づくのも大切で、そう気づいたところで終わることがあってもよいのです。けれども、このときの子どもの考えには、もっと大きな値打ちがあったのです。もしそのことに教師が気づいたら、それを引きださないでは終われないでしょう。

さあ、皆さんは、前掲の３人の子どもの考えにどんな値打ちを感じられるでしょうか。

私の感じる値打ちは、次のように子どもたちに語りかけることによって、子どもたち自身で気づかせていきたいと思います。

「みんなは、行く時も帰る時も同じ道だと、ごっつんこしちゃうと思ってたよね。帰る道は行く時の道とは同じではないと思ってたんだよね。……この実験をした学者のウイルソンさんは、実験する前、どう考えてたんだろう？　ここのところの文をよく読んで、グループで聴き合ってみよう」

そうしたら、きっと子どもは見つけてくるのではないでしょうか、「ふしぎなことに～」と書いてあることに。

つまり、ウイルソンさんにとっても、同じ道を帰ったのは不思議に感じることだったのです。ものすごい数のありが行列を作って進んでいくのに、まさか、ぶつかってしまう危険性のある同じ道を通るとは考えられなかったということなのでしょう。

そうわかったとき、子どもたちは、「自分たちも、えらい学者さんも、おんなじように考えたんだ」とうれしくなるでしょう。そして、説明文に、「ふしぎなことに」と書かれていることに触れた子どもたちも、ウイルソンさんと同じように「なぜありはそのようにするのだろう？」と思い始めるのではないでしょうか。

その子どもの思いは、説明文の先を読みたいという意欲を引き起こすことになります。この先に「なぜありはそのようにするのだろう？」を解き明かす説明が書かれているはずだ、早く読みたいと思うにちがいないからです。

そして、そこには、もっと大きな気づきへの道が開かれる可能性が存在しています。それは、それこそが、次々と疑問を湧かせて実験や観察を行う学者の研究なのだという気づきです。そう読めたとき、「ありの行列」という説明文は、単に、ありはなぜ行列をつくるのかが書かれているだけではなく、生物の生態を解明するための学者の研究の魅力までも書かれているのだと思うようになるのではないでしょうか。

これは、なんでもないような子どもの考えの事実が「見える」ことによって生みだすことのできるものです。つまり、子どもの事実のどこまでが「見える」かの異なりによって、その授業で生まれる子どもの学びに違いが起こるという一つの証明です。

やはり、子どもの事実を見ることは、授業をする教師にとって、とても重要なことなのです。教師にとって、「子どもの事実を見よう」とすることは欠いてはならないことなのです。

４　子どもの事実が見える教師になるために

このように、「子どもの事実を見る」ことができれば、たとえそれが一見しただけでは間違いだと思えることであっても、そこから豊かな学びの世界を生み出すことができるのです。そして、それは、教師に教えられて知ることでは味わえない学びの面白さ、深さ、喜びを子どもに感じさせることになるのです。

冒頭、私は、「教師は、授業のやり方よりも前に、子どもの事実を見るようにしなければならない」ということを、一貫して述べ続けていると記しました。それは、「ありの行列」のような学びは、子どもの事実が見えない教師にはできないことだからです。どれだけ発問の仕方を研究しても、どれだけ授業方法についての研究をしても、できないことだからです。

そこで、よく訊かれるのは、「どうしたら、子どもの事実が見えるようになりますか？」ということです。そういう人は、私の言っていることを正面から受け止めてくださって、自分もそういうふうになりたいと思われたのです。ですから、私としては、それはこのようにすればいいですとお答えしたいのですが、それはできないのです。特効薬のような方法があって、その方法をとればだれでもできるということではないからです。

教師の仕事は、唯一無二の教師が、一人ひとりが唯一無二の存在である子どもを対象として、瞬間、瞬間に生まれる考えや出来事に応じて、その場でつくり出す創造的な営みです。そういう創造的な仕事は、マニュアルのような方法を身につけるのではなく、経験を積み重ねて育てていくことで豊かになっていくものです。そこには失敗も挫折もあるでしょう。ですから、前述のように尋ねられた時は「とにかくやってみてください。うまくいかないことがあったら、どこがうまくいかなかった原因なのか〈ふり返り〉をしてください。教師の専門性は、経験でしか身につかないのですから」と答えることにしています。

ただ、そうはいっても、心がけたほうがよいことはあります。たとえば、子どもに対する言葉数を減らすようにするとか、子どもの話を丁寧に聴くようにするとか、授業を進めるテンポをゆっくり目にするとかいうことです。要するに、他者のことを少しでも深く受け止めようとすれば、自分をそれができる状態にすることが肝要なのです。

もっと端的に言えば、必要なのは「受けの心」であり、そのための「間」とか「ゆとり」です。子どもの発言を聴くとき、子どものしていることを見つめるとき、必ず「間」をとるのです。ゆっくりじっくり見つめ聴くのです。そのとき、教師の心に「待つ」という状態が生まれます。このことほど重要なことはありません。「待てない」教師には子どもの事実は見えないからです。

授業づくりの根底にあるのは子どもの事実を見ることです。教師が子どもにじっくり向き合いかかわる、そうすることで姿を現す事実が、子どもたちを豊かな学びの世界に誘うのです。学校教育に必要なのは、そういう営みなのです。コロナ禍でオンライン授業に踏み切った地域がありますが、それは危機に対する今だけのやむを得ない対処なのです。そこには、ここで述べたような子どもの事実から生み出す学びの世界は存在していないのですから。